

## POINT

# プロジェクト形式の 課題解決型学習 ＝PBL

学年、分野を問わずあらゆる学生が社会人基礎力を発揮できる場となるプロジェクト形式の課題解決型学習。学生の力をより引き出すための工夫を紹介します。

「社会人基礎力」の育成に効果的な教育手法の一つに、PBL（Project Based Learning）型の授業があります。

PBLは、学生が学んだ知識を利用して、プロジェクト（＝到達すべきゴールがあり、かつ、複数の人が関わるような取り組み）としての課題解決に当たる実践型の学習です。正解探求型の学習と違って、方法も解も一つではありませんので、指導する人のやり方によって、いかようにも展開できる教育方法です。

プロジェクトの推進には、異なる価値観を持ったメンバーでの議論、専門知識の活用や専門外の知識の取り込み、チームで物事を前に進めていく力などが必要となることから、「社会人基礎力」の育成に大きく寄与することは間違いありません。

● チーム内に対立や紛糾があつても、諦めず改善に向かう行動ができた

● 学んだ知識やスキルを実際に使い、机上の学びと現場との違いを実感することができた

● 最初に設定したゴールに到達し、その成果を効果的な形で発信することができた

## テーマの選び方

● 学生の知識やスキルのレベルを十分把握し、チャレンジングではあるが、難しすぎないものを選ぶ。

PBLの経験がない学生や、ゴール到達に必要な基本的な知識・スキルが不足している学生に、いきなり困難な課題を与えても、学生は混乱するばかりです。学生の能力をよく見極め、最初はなるべく身近なテーマから始める、あるいは上級生と組ませて、見ながら学ぶことができるような設定から始めましょう。易しめの課題に制約条件を付けることによって難易度を上げることができませんが、最初から難しい課題では、結局手助けが必要になる場合が多いのです。

● 学生の学びに近く、興味を引く「魅力的な」内容であること

活動を通して学生が知識やスキルの意味を知り、他の科目をより

PBLに正解・不正解はありませんが、成功・失敗はありません。PBLの失敗は、ゴールに到達できなかったことだけではありません。仮にゴールに到達したとしても、学生が主体的に取り組めなかったり、指導者が手や口を出しすぎて、結局学生は指示されるままに動くことになったりした場合は、PBLは成功とは言えません。逆に、最終的にゴールには行き着けなかったとしても、取り組みから多くを学ぶことができ、次の機会を活かすことにつながれば、長い目で見て失敗ではないと言つてよいでしょう。

PBLの指導者は、学生の活動を失敗も含めて見守ることが必要であると言われますが、活動の設定にそもそも無理があつたことに起因する場合は、学生は苦労が多いばかりで、活動を通じた満足を得ることはできません。活動の目的がわからないまま漫然とその場にいるだけでは、実践を通じた学びとはならないのです。

ここでは「PBLの成功とは何か」ということを軸に、教員の工夫によってPBLを成功に導く秘訣を紹介します。

### 「PBLの成功とは」

● 学生が主体的に取り組み、自分たちで解決策や対応を考え、実行することができた

● チーム内の誰か一人が負担をかぶるのでなく、全てのメンバーがそれぞれの役割を果たした

深く学ぶ必要があると感じたり、幅広い視野を身に付けたりすることもPBLの目的です。

● 1セメスター内など終点が決まっている場合は、ゴールを明確にしたものであること。期間内に完遂が可能であり、かつ盛りだくさん（あるいは、手持ち無沙汰）にならないこと

PBLの目標が、ゴールとしての成果物であるのか、その過程の活動そのもの（↓グループディスカッションやプレゼンテーションを体験すること）なのか、のポジションを明確にしましょう。成果物を出すのであれば、何をもってゴールとするのか（最終報告会のプレゼン、提案したイベントの実行など）を最初に学生に伝え、そこまでに行うか（行えばよいか）を学生と教員が共有することが必要です。

逆に、活動そのものの経験が目標であれば、学生にどのような活動をさせたいか（ブレインストーミング、KJ法、フィールド調査…）を明確にしておき、それらがテーマに合っているか、どのような場面で盛り込めるか、までを吟味しておきましょう。

● 学生が段階的に思考を深め、随所に意思決定や判断をする場面があること

●チームのメンバー同士が打ち解け合うまでの時間や工夫を惜しまない。

グループ学習のメンバーは、できれば日常生活ではあまり接触のない学生同士の方が、「社会人基礎力」を発揮する場面が多くなり、学生の成長を促すことは既に述べました。

そのため、PBLのスタート時には、課題に取り組ませる前にメンバー同士がお互いを知り、信頼関係を築くことができるよう、ゲームやお楽しみも取り入れ、十分時間を取るようにはしましょう。また、初めはグループディスカッションの際に、教員やTA (Teaching Assistant) などがファシリテーターとして入り、意見を引き出しやすい雰囲気を作ることも必要です。メンバー同士が信頼し合い、チーム活動が充実すれば、後半で追い込みをかけることも可能になります。

●マイルストーンをどこに置くかを決める。中間報告と最終報告は必須として、これ以外にも簡単な報告や振り返りを行い、進捗を確認する場を作る。

学生はどうしても目の前の課題しか見えなくなったり、毎年行っているものでは前にやったことの繰り返しに流れたりしがちです。報告会などのマイルストーンを置くことで、進捗を確認し、今後何

●オフィスアワーを十分に取る。学生の活動の方向付けを支えるとともに、もっと学びたい学生の向学心に応える。

PBLでは、先生の研究室で質問や相談に乗るオフィスアワーは、学生の疑問や不安に対応するために、非常に重要な役割を持ちます。1、2年生の学生には、全てを自発的に行う経験も知識も不足していません。教室だけでなく、学生がいつでも相談に行ける環境を整えておくことは、プロジェクトを成功に導くポイントです。一方で、PBLに慣れ、自発的に学ぶ習慣が身に付いた学生にとって、オフィスアワーは学びを深めるアドバイスを受ける重要な機会になります。金沢工業大学のPBL科目「プロジェクトデザイン」では、定期的を担当教員にオフィスアワーで報告することが、活動の一環に組み込まれています。

オフィスアワーは、教員が学生を個別指導できる場なので、チームの中で問題になっていることについてじっくり話を聞き、アドバイスを与えることができます。また、研究室を訪問するときのマネーなども含めて、「社会人基礎力」の育成にも有効です。

●ブレインストーミングやコーチングなどのスキルは、できれば活動に入る前に一度経験して方法を知っておくとよい。その場で初めて行うのでは、活動の本来の目的に届かないことがある。

を行うべきかを確認する機会を持たせましょう。これに合わせて「社会人基礎力」の自己評価や面接を行うことで、自分の成長や課題を振り返ることもなります。

●自分が立てたスケジュールに縛られすぎず、学生の反応によって、予定より時間を取ることも可とする余裕を持つ。その場合、調整可能な時間(コマ)を設けておく。

学生自身が活動を発展させることによって、予定以上に時間がかかる場合があります。今後ゴール達成に向けて有効な活動であれば、できるだけ学生のやりたいことを尊重しましょう。そのために、調整可能なスケジュールを最初から組んでおくことが肝要です。

●外部協力者に協力を仰ぐ場合は、まず十分な打ち合わせを。どのタイミングで、何を頼むかを事前に相談する。

外部協力者が活動に参加することは、学生にとっては大きな刺激になるとともに、そこで活動の方向性が変わる可能性もあります。そのため、どのタイミングで、どのような目的で、何を願っているかについては、事前に十分に相談しておく必要があります。また、外部者との予定だけは原則変更不可のものとしてスケジュールを組むことは、相手に対するマナーでもあります。

### 学生に対する教員の接し方

●PBLの教員の役割は、教導するのではなく伴走。学生の計画や思いを行動に移せるようにサポートする。

●最も重要なのが傾聴すること。学生が何をしたいのか、しようとしているのかをじっくり聞き、学生から話させる。

●重要なのは、ほめる・認める・励ます・承認する・感動を伝えること。成長を言葉にすること。プラスの部分に気付かせること。

●意見の違いを否定したりするのでなく、「こう思う考えがある」「こう感じる人がいる」ことを伝える。

●チーム内の人間関係を見る。対立が問題になっている学生は、肩を持つだけでなく、両方の聞き役になる。

●教員自身の思いや経験を伝える。

●ファシリテーターを必ず置く。解を誘導するのではなく、ほめ役、聞き役でよい。

特にPBLの経験のない学生は、正解のない課題に取り組んだり、他人と違う意見を持つたりすることに不安を抱えています。PBLで大切なのは、学生が自分の意見に自信を持って発信し、同時に違う立場や背景の意見を受け入れて、チームとしての解を作ることです。そのため、学生が発信する意見が肯定的に受け入れられる環境を作りましょう。そのためには、教員自身も自分の経験や思いを語る「自己開示」を行うことで学生との信頼関係を築き、よい意味で

対等に話し合えることが成功のポイントと言えます。

## 学生のスキル・態度に対して

● **社会規律やマナーは教える。知らなければここで覚えればいい。覚えれば、学生は将来必ず役に立つ。**

学生同士では当たり前でも、社会的には通用しないことが多々あります。言われないと気付くことはできません。企業への電話のかけ方、メールの送り方、挨拶の仕方など、教員が率先して、この機会を使って身に付けさせましょう。逆にこれを怠ると、例えばイベントの来場者に文句を言われるなど、失敗を招く原因にもなってしまいます。

● **遅刻しない、予習はきちんとやってくる、提出期限は守るなど、チームの活動のために必要なルールは、学生同士で決めさせる。**

学生が意識すれば改善できる態度・規律性の改善は、教員が押し付けるよりも、学生同士でルールを決めさせ、守らせるようにさせるとよいでしょう。ルールは守って当たり前、ではなく、態度が改善した場合は、その場でほめて認めましょう。チーム対抗でルール遵守を競うなど、楽しみながら学生の意識を高められるようにしましょう。

● **一番注意が必要なのは、無関心・無気力な態度の学生。ファシリテーターと協力して、何が原因かをよく観察し、学生が自分から発信できるように仕向ける。**

### マニュアルを作ってみましょう

ここで挙げたのは、PBLの実施に当たって一般的に注意すべき項目です。できれば、担当する教職員自身が自分の大学（学部、学科）のカリキュラムや学生の状況に合わせた指導マニュアルを制作するとよいでしょう。実際の授業場面や、学生の行動の具体的な例を挙げ、共有することで指導する教員同士の意思統一を図ることができます。平成21年度のモデル大学では、京都産業大学と広島経済大学が、このようなマニュアルを作成し、担当者同士のFDに役立てていました。

また、学生自身にプロジェクトを運営させる場合は、リーダーがいかにチームをマネジメントするかが重要になります。しかし、ビジネス書にあるプロジェクトマネジメントの手引きでは、学生の活動の実態と合わない部分が多く、教員の指導に任されることになりがちです。広島経済大学では、平成21年度に学生向けのプロジェクトマネジメント研修を行い、その研修内容を学生用のマニュアルにまとめています。このようなマニュアルを作る際には、学生自身に活動の問題点や自分達の解決方法を出させて内容に盛り込めば、自分達の活動を振り返る効果を持たせることにもなります。

結論：PBLの成功は、教員の「社会人基礎力」にかかっている。  
教員自身が「社会人基礎力」を発揮しよう。

\*この項の作成には、京都産業大学・広島経済大学の教員用指導マニュアルの内容を参考にしました。